

河野 航・ピアノ

KONO Wataru Piano

5歳よりピアノを始めた(らしい)。飽きっぽい性格が災いし、引越しや進学のためにピアノの勉強が中断され、おまけに中学校では吹奏楽部でチューバ、大学ではオーケストラに入ってヴィオラに気を散らす始末。ただし、チューバやヴィオラを勉強したおかげで、ピアノを弾くのにあたっては左手や中声を聴けるようになったという点もあるので、悪かったことばかりではないと都合よく解釈している。新交響楽団にヴィオラで入団した直後の演奏会で、伊福部先生の『シンフォニア・タブカーラ』に出会い、氏の作品に魅せられる。現在所属しているオーケストラ・ニッポニカではヴィオラを担当するが、ソリストとして迎えた三輪郁氏の演奏に魅了され、ピアノの勉強を再開、以来ピアノとヴィオラの二足のわらじを続けている。ピアノを鈴木和代、坪井圭子、近藤信子、柴沼尚子、故大島正泰、福本俊之、三輪郁の各氏に師事。

●

加藤のぞみ・ヴァイオリン

KATO Nozomi Violin

チェロに転向した従兄弟の代わりに3歳よりヴァイオリンを始める。『言葉を覚えるように』ヴァイオリンを『身につける』。初めての日本人作曲家の作品との出会いは、10歳のときの宮城道雄『春の海』。尺八の様な音を出すのだから、音の最初からヴィブラートをかけない、と教えられ、ノンヴィブラートの美しさを知る。新交響楽団に入団して『伊福部個展』で、ブラームスやマーラーとは全く違う管弦楽の世界が在る事に衝撃を受ける。オーケストラ・ニッポニカで活動する中で、日本人作曲家にも多くの魅力的な室内楽曲があることを知り、紹介したいとこの企画に取り組む。ヴァイオリンを故広瀬八朗、藤家桜子の各氏に、バロックヴァイオリンを若松夏美、竹嶋祐子の各氏に、室内楽を原田幸一郎、大西律子の各氏に師事。

今回の演奏に際しては、ニッポニカの日本人作曲家の作品演奏でも大変にお世話になっている高木和弘先生、そしてピアノの三輪郁先生に沢山のアドバイスを頂きました。

公式ホームページ

<https://tangaku-yukai.com/>

さまざまなか

探楽
愉快
Vol.5

2023年2月19日(日) 15:00開演

やなか音楽ホール

ご 挨拶

本日はお忙しい中を、演奏会にお越し下さり、ありがとうございます。

普段はオーケストラ・ニッポニカという団体で、日本人作曲家の作品の紹介を活動の柱の一つにして取り組んでいる私共ですが、日本人作曲家の作品同様に演奏される機会の少ないタンスマンの交響曲を取り上げた折に『タンスマニズム』というピアノ曲があって、なかなか面白い!』という発見がありました。橋本國彦が作曲したこの作品に何を取り合わせようかと、そこから企画のアイデアが広がったのです。タンスマンに触発されたのが『タンスマニズム』なのだとしたら、タルティーニへのオマージュの『タルティーニアーナ』という曲もある、とか、『タルティーニアーナ』には変奏があるけれど、昔からその美しさに魅了されていたシューベルトの曲は彼の歌曲の変奏が中核になっている曲だ、とか。芋づる式にプログラムが繋がったのです。7人の作曲家の作品を集めてみると、そこには「さまざまな歌」があり、それぞれに個性が光っています。

プログラミングしたところで、2020年の7月に会場を予約し準備を始めましたが、その年の春頃から新型コロナウイルスの影響が広がったために開催を延期。慌てずいつも通りに開催できるまで待とうと考えたものの、いつまで経っても「いつも通り」にはならないので、とうとう重い腰を上げて今日の日を迎えました。

音の楽しみを探することは愉快なり——これは作品との出会いで私共が心から感じることです。宝物を探して音楽の森を歩く楽しさを、少しでも皆様と共に味わうことが出来れば、これ以上の喜びはありません。

ダラピッコラ：タルティーニアーナ 第2 (1956)

Luigi Dallapiccola: Tartiniana seconda

橋本國彦：タンスマニズム (1933)

Kunihiko HASHIMOTO: Tansmanism

寺嶋陸也：グリーンズリーヴス変奏曲 (2009)

Rikuya TERASHIMA: Greensleeves - Variations

宅 孝二：プーランクの主題による変奏曲 (1952)

Koji TAKU: Variations on a theme by Poulenc

ヴィタリ：シャコンヌ

Tomaso Antonio Vitali: Ciacona in G minor

(edited by Ferdinand David, arranged for violin and piano by Léopold Charlier)

— 休憩 Intermission —

シューベルト：幻想曲 ハ長調 D.934 (1827)

Franz Schubert: Fantasy in C major

林 光：ヴァイオリンとピアノのためのラプソディ (1965)

Hikaru HAYASHI: Rhapsody for Violin and Piano

●

ピアノ・河野 航

Piano Wataru KONO

ヴァイオリン・加藤のぞみ

Violin Nozomi KATO

■ ダラピッコラ（1904-1975）：タルティーニアーナ 第2（1956）

作曲家林光は「結局、作曲家は編曲が好きである。新しい曲を書くのとは別の、すでにある曲に新しい着物を着せ、あるいは変貌させ、また建て増しをすることのよろこび」と述べている（林光：現代作曲家探訪記／ヤマハ・ミュージックメディア刊）。ダラピッコラは、イタリアで初めて12音技法を使って作曲したことや、ムッソリーニの人種差別政策に対する反抗を作品に隠したオペラ「囚われ人の歌」で有名だ。また、自国の古い時代の作曲家ヴィヴァルディに対する批判めいた発言をして、一部のバロック愛好者からは目の敵にされたが、実際には、ヴィヴァルディと同じくらい古い時期のジュゼッペ・タルティーニ（1692-1770）に深く傾倒し、作品を研究した。「タルティーニアーナ 第2」は、対位法について多くの示唆を得たタルティーニへのオマージュとしてヴァイオリンとピアノが語り合うように書かれており、まさに林光が言う通りに、ダラピッコラがタルティーニの作品に「新しい着物を着せ」ている。

- 第1曲 **Pastorale** ヴァイオリンはタルティーニの原曲をそのまま演奏し始め、ピアノが途中から加わる。譜面を良く見ると、ピアノはヴァイオリンが弾くフレーズを後ろから弾いていることに気づく。ピアノは遅く弾き始めた分、居残ることになる。
- 第2曲 **Tempo di Bourree** 古典的な舞曲のはずだが、robusto（強く）とかmarcato（一音づつははっきり）とかdeciso（決然と）とか、似つかわしくない指定ばかりある。
- 第3曲 **Presto: leggerissimo** 鳥がさえずったり、羽をパタパタさせたりしているような光景が目に見え、鳥は3羽いるらしい。強弱の指定はmpが最高で、pppまで。
- 第4曲 **Variazioni**（変奏曲）最初にヴァイオリンが原曲にある変奏を抜き出しここでの主題として力強く示す。6つの変奏はそれぞれ譜面で見ると、ピアノとヴァイオリンが追いかけてこなくなっていたり、ピアノとヴァイオリンのメロディーが五線譜上で鏡写しのようになっていたり、同じフレーズをヴァイオリンが最初から、ピアノは最後から同時に弾いていた、ピアノソロになったり、1つの小節の中で音型の遊びがあったりと、多彩な変奏が繰り広げられている。

ダラピッコラはこの曲が余程気に入っていたらしく、後にヴァイオリン独奏+オーケストラによる異なるバージョンも作っている。（N）

● 楽器編成：ヴァイオリン+ピアノ、演奏時間：約11分 ● 使用楽譜：EDIZIONI SUVINI ZERBONI

■ 橋本國彦（1904-1949）：タンスマニズム（1933）

1933年4月に月刊楽譜発行所が出版した「『月刊楽譜』第二十二巻 四月号」には、「タンスマンの音楽」と題された評論家・大田黒元雄の文章とともに、この曲の楽譜が附録としてつけられている。1932年から翌年にかけて、ピアニストでもあったポーランドの作曲家、アレクサンドル・タンスマン（1897-1986）は、世界一周の演奏旅行をし、日本にも1933年3月に立ち寄っている。その際に、昭和天皇の御前での演奏や、仁寿講堂での演奏会、荻野綾子のソプラノによる自作歌曲のレコーディングなどを行っている。

橋本國彦がタンスマンの来日公演にどのように関わったかは不明だが、附録楽譜の表題「Tansmanism」の副題として、「タンスマン氏來朝の日に」と記されている。テンポ表示はTempo di Mazurkaとされ、ポーランドの民族舞踊であるマズルカを作品に多く取り入れたタンスマンの作品、そしてその演奏に影響を受けて作曲されたものと想像できる。

へ長調のハーモニーの上に、へ長調から最も遠い口長調の歌心あふれる旋律が乗り、抒情的に始まる曲は、マズルカの特徴である2拍目、3拍目のアクセントを伴って高揚したあと、冒頭の旋律を回想し、泡沫であるかのごとく、消え入るようにこの短編の幕を閉じる。

作曲された1933年に、橋本國彦は東京音楽学校の教授に抜擢され、翌年にはウィーンへ留学することとなるが、ドイツでは1933年にナチス政権が成立、日本は国際連盟を脱退する。洋の東西を自由に行き来できた時代は去り、戦時下へと日本も足を踏み入れていく暗黒の時代へ向かうこととなる。橋本國彦も戦時中は軍国歌謡の作曲などに関与したが、戦後はその責を取り教職を辞する。その後作曲された交響曲第2番

は日本国憲法の公布を祝うもので、平和の響きを鳴らしていこうとしていた矢先、志半ばにして1949年に病魔に倒れた。短いこの曲にも、橋本國彦の音楽に対する夢が込められているのではなかろうか。（W）

● 楽器編成：ピアノソロ、演奏時間：約3分 ● 使用楽譜：『月刊楽譜』第二十二巻 四月号 附録楽譜

■ 寺嶋陸也（1964-）：グリーンズリーヴス変奏曲（2009）

「グリーンズリーヴズ」は、シェイクスピアの《ウィンザーの陽気な女房》にも言及がある有名なバラードで、16世紀頃からイングランドで歌われていたらしい。さまざまな歌詞で歌われたようだが、一般的なのは、ふられた男がかつての恋人への思いを延々と嘆くものである。

「グリーンズリーヴズ」という曲を意識したのは、通っていた小学校の下校の音楽としてヴォーン＝ウィリアムズの《グリーンズリーヴズによる幻想曲》が使われていたためだったが、その曲を初めて聴いたときにも、すでにこのメロディーは知っていて、日本語の歌詞の断片まで思い浮かぶのだが、それは、「自然の緑を返してくれ」というようなもので、もしかしたらそんな内容の替え歌があったのを幼児のころに聴いたのかも知れないし、勝手に自分で歌詞をつけて歌い、聴いたような気になってしまったのか、今となってはよくわからない。

ヴァイオリン独奏のための《グリーンズリーヴスよる変奏曲》は、2009年にヴァイオリニストの川島成道さんのために作曲したもので、主題と7つの変奏から成っている。コンサートでたびたび取り上げていただき、彼の最新アルバムにも録音されたが、実はこの変奏曲の作曲は高校を卒業して浪人していたときに遡り、最初の編成は、マンドリン、ギター、コントラバスとピアノ、という編成だった。その後、マンドリン・オーケストラのためのものと、クラリネット・ヴァイオリン・チェロ・ピアノのための4重奏のヴァージョンを作った。それぞれは変奏の数や長さには違いがあるが、バロック風、古典派風、ロマン派風、後期ロマン派風など、さまざまなスタイルの変奏を含む構成は、最初に書いた時からほとんど変わっていない。（寺嶋陸也）

今回の演奏に際し、作曲者から譜面とプログラムノートの提供を頂きましたことに心より御礼申し上げます。

● 楽器編成：ヴァイオリンソロ、演奏時間：約8分 ● 使用楽譜：出力譜（作曲者所蔵）

■ 宅 孝二（1904-1983）：プーランクの主題による変奏曲（1952）

1957年に音楽之友社より出版された世界大音楽全集第33巻に、この曲の楽譜とともに掲載された作曲者本人による解説をまず転載する。

プーランクの作品の中で一番よく弾かれる曲を主題として変奏曲を書いてみた。親しみと楽しさと自然さの中に、思いやりに複雑、難解へ逃避して音楽性の欠如と才能の貧困さをカヴァーしている風潮に対しての抵抗にもなり得れば幸であるという動機も、心の隅にうごめいていたかも知れない。いうなれば、書斎の音楽、学者の音楽、芸術家の音楽よりも、もつと広い、低いところにある音楽としたいのが作者の趣旨であつた筈である。しかし！だから！必然的に演奏はぐんと緻密に、十分研究して、よく消化しきれぬまで徹底してもらいたい。特にテンポは厳密に、曲の最後の1拍目までゆるぎなく正確に守ってもらいたい。リズムとアクセントは実に正確、明確にってもらいたい。タッチはあくまで歯切れよくドライに。殊にペダルは最少量の使用に止めて十分注意を願いたい。この曲では芸術的と称する、あいまいな、不正確な、不消化な演奏は作曲者をひどく悲しませるものであることに御同情をよせられたい。そして十分マスターした上で、絶対に面白くなくてはならないこともお願いする。なぜならこれは聴衆のための作品であるから。こうは申し上げても、これは私の我儘であるから、演奏者がベストをつくして下さった後は、作曲者のことや、その申し分にならぬ気がねをすることはないので、自由な気持ちでなければよい演奏、生きた演奏ができないことも十分承知している。まあよろしく努力をして下さり、たびたび弾いて面白くして下さい、しあわせこの上もないというところである。

主題は、1918年に作曲されたフランス・ブーランク（1899-1963）の《3つの無窮動》（Mouvements Perpetuels）より第1曲である。様々な種類の音楽ジャンルが変奏に盛り込まれ、ジャズピアニストでもあった作曲家が求めた、様式美とは対極にある自由な音楽の世界が広がる。

主題：Assez modéré ブーランクの楽譜がほぼそのまま採用されている。変口長調の穏やかな響きの中に、様々な表情の旋律が百面相のようにかわるがわる現れる。変イ音と変口音、変二音と変ホ音の9度の響き、それに挟まれた無色（incoloreとの指示がある）な下降音型は特徴的なものとして変奏でもしばしば現れる。

第1変奏：Allegro オスティナートを伴うジャジーな変奏。

第2変奏：Andantino タンゴを想起する低音の強音がこの変奏を特徴づける。

第3変奏：Moderato 歌心あふれるシャンソンのような美しい変奏。

第4変奏：Andante レチタティーヴォ風の語るような悲しげな旋律を伴う変奏。

第5変奏：Allegro molto ritmico 8ビートのリズムに乗せたリズムミックな変奏。第4変奏まで徐々に主題から自由に解放されてきていたが、ここにきて再び忠実に主題の特徴が表現される。8ビートのリズムを伴ったまま最高潮を迎える。(W)

● 楽器編成：ピアノソロ、演奏時間：約12分

● 使用楽譜：MUSE PRESS 社 刊、サラ・デイヴィス・ビュクナー校訂版

■ トマソ・アントニオ・ヴィタリ（1663-1745）：シャコンヌ

ヴァイオリン曲の「シャコンヌ」といえば、バッハによる無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番（BWV1004）の終曲か、この曲かといわれるほどよく弾かれ、よく聴かれる曲であるが、この曲の手稿譜はヴィタリ本人によるものではなく、ドレスデンのリンドナーによるものであり、作曲がヴィタリのものであるかどうかという点について疑念が呈されて久しい。手稿譜がヴァイオリン独奏に通奏低音が付されたバロック期のものであることは事実であるので、作曲者が誰であるかの点については専門家の研究にゆだねたい。メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲を初演したフェルディナンド・ダーフィット（1810-1873）が校訂したことにより世に知られることとなり、1911年にレオポルド・シャルリエ（1867-1936）により華やかな演奏効果が付加された版が今日最もよく弾かれるものであるが、他にもいくつかの版がある。

ト音一へ音一変ホ音一ニ音のバスのオスティナートは、この曲全体を支配する。ヴァイオリンによる主題が提示された後、様々な形で変奏されるが、このバスは常に曲を下支える。8小節の主題の最後の2小節は、2分の3拍子の2小節分を、2分音符×3の音型（ヘミオラといわれる）となっており、主題の終止を印象付ける。

特筆すべき点は、頻繁な転調を伴うことであり、シャルリエ版では、ト短調、変口短調、へ短調、ト短調、イ短調、ト短調、変ホ長調、変ホ短調、ト短調と様々な調を行き来しているが、実はこの転調は、ダーフィットやシャルリエにより曲を華やかにするために施されたものというわけではなく、（一部に差異はあるが）バロック期に書かれた手稿譜でも書かれている。バッハのシャコンヌがニ短調に始まり同主調の二長調に転調するのみであるのに比べて、ドラマティックである。(W)

● 楽器編成：ヴァイオリン+ピアノ、演奏時間：約10分 ● 使用楽譜：ブライトコプフ版（シャルリエ編）

■ シューベルト（1797-1828）：幻想曲 ハ長調 D.934（1827）

シューベルトは「幻想曲」を3曲、残している。一番有名なのは、自身が作曲した歌曲「さすらい人」の旋律が登場するので「さすらい人幻想曲」と呼ばれる1822年に作曲したピアノソロ曲。「幻想曲ハ長調D.934」はヴァイオリンとピアノの為に1827年に作曲され、こちらも自作の歌曲「挨拶を送ろう」の旋律が使われているので「挨拶を送ろう幻想曲」と言えるのだが、実際にそのように呼ばれることはない。

シューベルト最晩年の1828年に作曲された「幻想曲へ短調」はピアノ連弾のためのものだ。

本日取り上げる「幻想曲ハ長調 D.934」の構造をみると、全体は3つないし（イントロダクションの部分独立した部分とすると）4つの部分に分けることができるが、演奏は全て続けて行うように書かれている。全体の中央部分で、歌曲「挨拶を送ろう」の穏やかで憧れと寂しさに満ちた旋律がのびやかに変奏される。「幻想曲」の名が示すように、彼が生きた時代に完成された「形式」から離れて自由に大きな音楽が展開される。手が届かないと解っいても諦めきれない「憧れ」を音楽にしたようなこの作品が、治る希望のない病に侵されていたシューベルトの死の前年に書かれたと思うと胸が詰まる。ヴァイオリニストの五嶋みどり「古典時代から現代に伝わるヴァイオリンとピアノのための最も美しい作品の一つと数えられています」と述べている。(N)

● 楽器編成：ヴァイオリン+ピアノ、演奏時間：約23分 ● 使用楽譜：ヘンレ原典版、ベーレンライター原典版

■ 林光（1931-2012）：ヴァイオリンとピアノのためのラプソディー（1965）

昨年没後10年を迎えた作曲家・林光は、東京藝術大学の学生に対する対応や体制に疑義を呈して中退し、1953年には「山羊の会」の結成（外山雄三、間宮芳生らとともに）、1956年に第4回尾高賞を受賞と、積極的に作曲活動を行っていた時期に、この曲を書いている。作曲家自身の言葉による簡単な解説を転載する。

冒頭に現われるアジタート（Agitato）のメロディーが全曲の主要なモチーフとなっている。第1部の主題、第2部の序奏と中間部の主題がそれに基づいている。コーダもまた第1部の序奏の再帰である。（「ヴァイオリンとピアノのためのラプソディー」音楽之友社刊 1967年）

大阪労音の委嘱により作曲。はじめてのヴァイオリン独奏曲。短波ラジオで聴いた南ヴェトナムの流行歌謡の、哀切きわまりない旋律を出発点としたのだが、筆をすすめるうちに、旋律そのものが変化し、ほとんど痕跡を残さないまでになってしまった。冒頭でヴァイオリンがひく主題の中の、上行下行する完全4度の音程のほかは、ヴェトナム戦争が終結するのは10年のちのことになる。おそいのと速いのとの、二つの部分に分かれる。（「サントリー音楽財団コンサート 林光」プログラム 1993年）

この曲はベトナム北爆が始まった年に作られており、戦火にさらされるベトナムの人々に心を寄せていることがわかる。ちなみに、オーケストラ・ニッポニカが次々回演奏会で取り上げる林光の交響曲第3番『八月の正午に太陽は…』は北京の天安門事件を契機に書かれた作品。林光は常に自らが生きる世界、社会、時代と対峙しつつ作品を書いた作曲家だった。

本日取り上げられるヴァイオリンソロ曲の作曲家寺嶋陸也は、小学生の頃から林光のところに作曲を習いに行っていたようで、「作曲の仕方ということより、生き方に影響を受けた」と述べている。

第1部：Agitato: quasi Allegretto 序奏でヴァイオリンによって示されるモチーフがこの曲を通しての軸となる。短いヴァイオリンのカデンツののち、ヴァイオリンがうたいあげる旋律の悲しげなこと。曲はアタックで切れ目なく第2部に続く。

第2部：Allegro: alla Marcia — Agitato: quasi Allegretto 導入は第1部冒頭を短く圧縮した動機に続き、重い行進が戦争行軍を想起させる。コーダは第1部の冒頭が再帰するが、表現すべきものがあふれ、拍子が余剰のあるものになったり、より重厚な和音を伴ったりと、譜面から訴えかけられるものが怒涛のように押し寄せる。

この作品の背景にベトナム戦争があるのは作曲家自身の言葉のとおりで、このときは戦争終結まで10年以上を費やした。昨年ウクライナを舞台に継続されている戦争が終息を迎えるのに、同じ期間を要しないことを切に祈る限りである。(W)

● 楽器編成：ヴァイオリン+ピアノ、演奏時間：約12分 ● 使用楽譜：音楽之友社刊